

## パネル発表「学校飼育動物に携わって感じた事」

藤掛 誠

第6回学校飼育動物研究会に私達，板橋区獣医師会学校飼育動物委員会の活動内容をパネル展示という形で発表の場を頂き，中川先生には委員会を代表して感謝申し上げます。微力ながらも確実に進めて行こうと常日頃委員会での話し合いを行ってきました。

この委員会は平成5年から獣医師会有志で区内57小学校の飼育の現状の調査から始まり，それぞれの病院が学校の飼育動物を個人的に面倒を見ていたのでは，ばらばらなので獣医師会で事業の一つとして，学校飼育動物に対して我々獣医師の役割がとても大事である事を言い続け，平成9年より準備委員会を経て板橋支部の事業とする事が正式に決まり，最初三人で始めました。その当時入会間もない新人の先生が参加してくれました。

私達はなんの情報もなかったもので，とりあえず，現状の実態調査を行い，それらをデータ化し，その次に北多摩支部の「学校通信」群馬県獣医師会のすばらしいテキストを参考に自分達で「私達の小さなお友達 ウサギ，ニワトリ編」を作成し，その次にはパート2としてモルモット，ハムスター，小鳥編を作成，これを合併号として作成し直しました。また最後に水棲動物としてのカメ，キンギョ，メダカ編を補足し

現在の「私達の小さなお友達」が完結しました。この本は区内57校の小学校に2冊づつ，寄贈，また区立図書館及び図書室に2冊づつ，寄贈してあります。

ここで委員会のメンバーの一人が完結編を見ることなく，病気により他界してしまいました。この彼の委員会での功績はとても大であり，可愛らしい挿絵のほとんどは彼の手書きでした。今回，このパネル発表を行って思ったのは，今は亡きT先生の事が思い出されて仕方ありません。これからもこの委員会は面々と続いて行くと思います。

また私自身，委員会活動と同時進行で老人ホーム（特別養護）へ大人しい犬や猫とボランティアの飼主の方達と訪問し，お年寄りの方達へ直に触ってもらい，少しの間ですが心和む時間を過ごしてもらい「動物とのふれあい活動」を行って来ました。

施設のお年寄りの方達の約70%は大なりしよなりの認知障害があり，1日の大半混沌した世界にいますが，動物に触れ始めて5分位すると，動きが活発になり，時おり思い出したように「可愛いねー」とつぶやきます。この瞬間は人がどんなに話かけても反応しないのに動物の体を触り始めると「やわらかいねー」「あったかいよー」と声を出して能面のような顔つきが徐々に柔和になって来るのがとても良く判ります。昔犬や猫を飼育していた記憶が少しずつ思い出されるのでしょう。この現場を10年，見てきて思うのは小学校の飼育委員会の児童達に学校訪問し，飼育されている動物の事を話し合っている時の児童の目の輝きと似ていると思いました。

小学校の児童達と対極的立場にある特養のお年寄り達との共通点は動物達とのふれあいにより『心の癒し』になり，児童達もお年寄り達も動物とふれあっている時の顔は本当に柔和になっている事。もう一つの共通点としては免疫力は共に弱いので動物からの感染にだけは細心の注意が必要だと言う事です。その為にもこのような研究会の協力を基に安心して学校の飼育動物に触れて貰う為に確実な歩みが必要であります。

ここで大事な事は教育委員会と行政（保健所等），そして獣医師会の連携で成り立ってきたこの活動にはどうしても校医さんとしての医師会の協力なくては完全なものではないと考えています。私達，獣医師は動物の健康や関連した事は話せますが，児童の健康の事は話せません。ここ何年も医師会にアプローチしていますが，まだまだ足りません。これからも医師会，教育委員会，そして獣医師会との協力の基に子供達の『飼育動物との素敵な共生を』と考え，努力していきたいと思えます。

思い起こせば，約45年位前に自分が小学生の頃，4，5，6年生と飼育委員会に入っていて，その延長線上に今日の自分があると言う事を強く感じました。

（板橋区獣医師会学校飼育動物委員会）